

東日本大震災に於ける当院の医療支援 －岩手県大槌町でのリハビリテーション支援について－

三橋 武信 小野めぐみ 山田 綾子 笠井真奈美
つがる西北五広域連合 西北中央病院

【はじめに】

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方の太平洋沿岸部に大津波による甚大な被害をもたらした。その後、多くの被災者は避難所生活を余儀なくされ、被災地の医療機能は壊滅状態となった。

当院では、青森県からの要請を受け、岩手県大槌町の避難所において医療支援を行うこととなり、発表者も医療チームの一員として医療支援活動に参加する機会を得たので、活動内容を報告する。

【概要】

青森県からの要請は、岩手県大槌町の大槌高校の避難所に仮設された救護所における医療支援活動であった。震災後の3月24日から6月11日に渡り、合計13の医療機関の医師13名、看護師その他のスタッフ総勢52名での活動となった。

当院の支援活動は3月30日から4月6日までと、4月20日から4月27日までと比較的早い時期であり、(社)日本作業療法士協会としてのボランティア派遣が始まった時期であった。避難所生活者も多く、被災地にはがれきも残っており、復旧もままならない状況であった。

発表者が派遣されたのは、4月24日から27日までの4日間であり、同行したチームスタッフは医師2名(内科医1名、整形外科医1名)、看護師2名、薬剤師1名、臨床工学技士1名(連絡調整係)であった。

医療支援活動時間は午前9時から11時30分までと午後1時から4時までで、夜間救急診療も含め無料診療であった。災害対策本部が釜石市にあり、診療終了後に医療チーム代表医師が、対策会議に参加し情報交換を行った。

宿泊は大槌高校の理科実験室で、マットレスに寝袋での就寝、食事は自炊であり、自給自足が原則であった。

【支援活動状況】

支援活動は、大槌高校の避難所を回り、支援を必要とする方を探すことから始めた。支援できる内容(機能訓練、杖・装具の提供など)を書いたプロフィールを配布しながら、被災者に声をかけて回った。

被災者の話を傾聴しながら寄り添うように心がけ、被災時の思いを引き出しすぎないようにとど

めた。

先行チームからの情報で、膝装具やマックスベルトなどの装具が不足しているとのことであり、装具やサポーター類、杖などを持参したため、多くの方に提供することができた。また、避難所内で支援が必要な方の情報も得ていたため、関節可動域訓練などの機能訓練を提供することもできた。機能訓練を行った方の情報は、救護所のカルテに記載され、閲覧が可能であった。

避難所を回る中で、受診が必要と思われる方には、受診を促したり、救護所で診察を受けた方に装具や杖の調整をするなど診療の補助的な支援も行った。

同じ避難所内で活動している支援チームに、愛知県の保健師チームがあり、大槌高校以外の避難地区(一般家庭)も巡回しているとのことで、同行させてもらった。避難生活で、腰痛を患った方には腰痛体操の資料を配ったり、杖を流された方には杖の長さを調整して提供したりした。片麻痺で寝たきりの方へ関節可動域訓練も行った。

大槌高校内の避難所でも日中臥床がちとなり、起居動作が困難な方がいるとの情報があり、起き上がりや歩行訓練を行った。

最終日の27日には交替で着任した長野県医療チームのPTへ申し送りを行い、支援活動終了となった。

【まとめと考察】

活動内容をまとめると機能訓練を行った方が延べ16人(訪問2人)、杖の提供が7本(訪問1本)、膝サポーターの提供が7枚(訪問1枚)、腰痛体操の指導が2件(訪問2件)であった。

今回の医療支援に於いて発表者のリハビリテーションスタッフとしての役割は、①避難所(自宅避難者も含む)での機能訓練必要者のチェックと実施、②装具など必要者のチェックと物品提供、③受診が必要と思われる方に受診を促したり、診察を受けた方に装具や杖の調整をするなど診療の補助的な支援、④活動を制限された中での廃用症候群の予防、⑤以上の事項を継続的に次の支援者へ申し送ることであったと考える。

後に、岩手県作業療法士会でも大槌町に支援に入っていたと知り、そちらとも連携できればよかったと考える。